

# 東京バッハ合唱団 月報

【第 538 号】 2007 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.538  
April 2007

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 第 100 回定期、日本語《マタイ受難曲》 速報

大村 恵美子

3月21日の第100回定期演奏会は、予想以上の大成功裡に終わりました。その反響（会場アンケートも含めて）は、数日たった今でも続々と寄せられて、まだまとめる段階にはありません。

現在までで、一様に伝わるのは、「感動」「圧巻」「しあわせ」等の、それぞれ一語につき、と、全体の印象を端的に表わす方々の多いことです。とくに訳詞、指揮、エヴァンゲリスト、児童合唱への讃辞が多く、合唱、ソリスト、オーケストラ、会場の音響効果等、すべてにわたって喜んでいただけたようです。

私たちのいちばん懸念していた、新しい会場とお客様の混乱防止の点も、いくつかの課題を残しつつも、まずまず平穩におさまったようでした。

今回は、近いうちに記念文集作成のため、関係各方面からの感想やご意見が寄せられる予定ですので、それで詳細が伝えられることでしょう。

この演奏の録音CDの予約も多く、たった1回限りでなく、また演奏してほしい、という声も、ずいぶん上がっています。ご都合でやむなく来聴できなかった方々もそうですが、中には今度こそ歌って参加したいという希望もたくさん伺いました。

かつて、《ミサ曲口短調》を初演した（1987年、創立25周年）あと、すぐに、近いうちに再演したいと考えて、5年後の1992年（創立30周年）に実現させたことがありました。作品の魅力もさることながら、演奏上、心残りの点がいくつかあって、再演で完成に近づきたい、という思いが、直後から生じたのです。《マタイ》や《口短調》のような大作品は、1回目で満足の域に達することはまれで、何度もくりかえしながら理想が実現されてゆくものであることは当然です。

今回の《マタイ》も、25年を隔てての再演ですが、国内の《マタイ》受容の状況だけを見ても、25年前とは文字通り、隔世の感があるほど、《マタイ》は全国に普及してきました。また、日本語訳詞演奏も、「カンタータ50曲選」の楽譜・CDの完成後は、マスコミで集中的にとりあげられて、肯定的な評価もやっと多くなってきました。

3月21日の来聴者のなかでも、CDなどはありったけのものは繰り返し聴いているが、なまの演奏に立ちあうのは初めて、という方がずいぶん多くいらっしゃいました。

た。この傾向は一般的なもので、コンサートで一堂に会してステージと客席一体となって、音楽の空気に心身ともに浸るという経験なしに、あの盤はここが特徴、だれそのあそこが欠点、というふうに、ただ高所から批評をふりおろす快感を音楽鑑賞ととり違えている向きが、ふえているようです。

その態度が、なまのコンサートの場合にも支配的で、音楽をみんなで共有する喜びよりも、審査員のように判定しているのでは、さぞかしどのようなコンサートにも満足することはなく、やはり、なまのより、電気を通してわが家で、定評のある世界的に著名な演奏録音を聴くほうが安心、ということになるのでしょうか。

さて、私は、この数日間の再演要望の声に触発された面もありますが、当日のステージ・客席、双方のよろこびを身に浴びて、この成功を、より深めていって近いうちにもっと確かなメッセージにしてお届けしたい、という気持ちが強くなりました。

ことに、エヴァンゲリストの鏡貴之氏は、勉学中の若さで、これが初めての《マタイ》、もちろん日本語も初めてということでした。リハーサルを何回かしましたが、初回と本番の1週間だけで、長足の成長が目に見えるほどで、みんなを驚かせました。こんどは早くからお願いして、5年後（2012年）の創立50周年記念に、どれだけ完成に近づかれるか、研鑽の成果を聴かせていただきたいとねがいます。

他の奏者たちも、《マタイ》の入り口に立った方、2度目の経験で、自分の役割により自由に入りこめるようになった方、それぞれに5年後を目標において精進すれば、すばらしいことになるのではないのでしょうか。私は早くもそういうヴィジョンを抱き、3月24日の団員相談会で打ち明けましたら、大いに賛意を得ることができました。

つまり、これほどに今回の演奏会は、あかるい前向きな力を生じさせてくれたのです。

この1年間ほど、電話や、お会いするごとに、「3月21日の《マタイ》を楽しみにしています」と励ましてくださった多くの方々にお応えすることができた喜びを、これからまたさらに深め、広めて、将来へとつなげてゆく希望に、早くも身を置いています。〈FINE〉

## 3歳の息子のバッハ・デビュー

菅谷 恵理子

3月3日、世田谷中央教会にて《マタイ受難曲》の特別演奏会が行われました。圧倒されるような大合唱のなか、児童合唱の澄んだ声が天に響くようでありました。このなかで、息子の基樹も加えていただきましたこと、心より感謝いたします。

バッハの壮大な曲のなかで、3歳の息子も身をおくことができたこと、児童合唱の練習の片隅にでも座らせていただけることを望んでいた私たち両親にとりまして、まさかお兄ちゃま、お姉ちゃまとともに児童合唱のメンバーとして、練習に参加させていただけるとは思ってもみないことでした。

大村先生、光野先生、内山先生には、毎回の練習のたびに、息子のたわいもない発言までとり上げていただき、細かく配慮をしていただきながら、ご指導くださいましたこと、心より感謝いたしております。

基樹は、東京バッハ合唱団の練習にかよっていることを誇りに思っているようで、お肉屋さんのおばさん、クリーニング屋のおばさん、ペンキ屋のお兄さん、教会の方々等々、出会う方たちに「バッハ合唱団の練習に行くの。大村先生なんだ！」と、自分から話していました。

私が《マタイ受難曲》の1節を歌ったり、バッハの曲のCDをかけますと「ママ、いまのバッハ？」と尋ねるようになり、バッハの音楽の一端を3歳児なりに感じるようになったようです。家中のぬいぐるみを集めて並べ「バッハの練習」といっては、指揮棒をもち「おおきき羊 十字架にほふられ」「主こそわが救い」と歌っている息子の幼いからだの内に、バッハの曲をとおして、聖書のことばが染みこんでいくのを感じました。

リハーサルを前にし、緊張感も増してきた児童合唱の皆さまに、これ以上ご迷惑をかけてはいけなないと、2月末には大村先生に「息子の《マタイ受難曲》は、ここまでのように思います」と申し上げたのですが、「当日、駄目そうだったらやめたらいいじゃない。やってみましょうよ」と励ましていただき、迎えた本番でした。

当日のリハーサルでは、息子は頬を紅潮させ、精いっぱい歌っていました。本番は息切れてしまったようですが、周りのお姉ちゃまと共に助けていただき、なんとか冒頭合唱を歌わせていただきました。

半年間の貴重な機会をあたえていただき、感謝いたします。ありがとうございました。

(最年少児童団員の保護者)

(筆者の菅谷恵理子さんは、団員の加藤剛男氏のお嬢様で、25年前の《マタイ》公演には、児童合唱団の一員としてお歌いになり、このたびのご子息の参加で、親子3代の《マタイ》出演となりました。)



《マタイ受難曲》(抜粋) 特別演奏会  
3月3日(土) 世田谷中央教会  
(写真撮影・川戸龍夫)

## ミケランジェロ ロンダニーニのピエタ を尋ねて・・・

大村 恵美子

3月号月報に、ミケランジェロの ロンダニーニのピエタ に関する文章を知りたい、とお伝えしたところ、さっそく後援会員の小島陽子様から、まさに私の希望にぴったりのご本をご恵贈いただきました。

彩草じん子著『安田侃、魂の彫刻家』(2005年、集英社)です。安田侃(かん)氏、著者の彩草(あやくさ)じん子氏、いずれも始めてお名前をお伺いしました。

この本は、1945年生まれの世界的彫刻家の紹介であるとともに、その安田氏が、ミラノにある ロンダニーニのピエタ に触発されて、創作活動を究めてゆく道筋がよく描かれていました。いまは安田侃に関することはすべて省略して、もっぱらこの本のなかで出会う ロンダニーニのピエタ 関係の箇所を、引用してご紹介したいと思います。興味をひかれた方は、この本全体をぜひお読みくださるよう、希望します。

[あいついで、やはり後援会員の森彬様からも、芳賀力著『思索への小さな旅』(2004年、キリスト新聞社)をご紹介いただきました。これもたいへん参考になり、ありがとうございました。]

以下、1文字下げは、著者・彩草じん子氏の地の文章、「」内は、安田侃氏の発言の引用。

安田侃は、・・・ミケランジェロの ロンダニーニのピエタ を見て、彫刻家として、大理石のなかに精神を刻み込もうという情熱を手に入れた。(p.85,86)

「ロンダニーニのピエタ を見たとき、精神 だけ形にするとこんなふうになるのかと思った。」(p.16)

自然から発せられるエネルギーをひとつの石の塊に封

じ込める・・・(p.7)

「石という素材の持っている神秘性みたいなもの」  
(p.8)

「精神が形を求める。形が精神に生み出される。精神と物体を融合させる。・・・不可視のものが宿った形は、別次元へと誘うきっかけとなる・・・」(p.16)

真の芸術家は、ある時、無意識に精神のさらなる高みへと入り込み、永遠の世界を垣間見るのではないだろうか。人間の本質を見据えた真の芸術は時空を超える。  
(p.20)

強靱な体力と人並み以上の気力、無心になってのめり込める持続力 (p.65) をもって、安田侃は、ミケランジェロのあとを追ひ、イタリアの大理石の産地の石切り場に腰をすえて、本格的な大理石彫刻と取り組むようになる。私(大村)がこの本で知りえた大きな収穫のひとつは、ロンダニーニのピエタ や 奴隷 などの彫刻から得られる、大理石という素材と芸術家の深い関係を、かなり詳細にたどれたことだった。安田の仕事を表す記述のなかには、精神やエネルギーをひとつの石のなかに封じ込める、刻み込める という表現が見られるが、むしろ私の印象では、ミケランジェロの、上述のような作品では、石のなかから実質・実体が、彫刻家の手によって解き放たれる、掘り出される、というふうに見える。しかしそれはどちらということもないかもしれない。

さて、その大理石を求めて、最晩年のミケランジェロも、危険をかえりみず山に登っていった。

ミケランジェロは神秘的な白さを宿す大理石を求めて山に分け入った。89歳のときの未完のロンダニーニのピエタ 像の原石が掘り出されたのは、モンテ・アルティッシモの採石場である。・・・今ではもう閉じられてしまっていて、そこへの道も崩れ、訪れる人は滅多にいないというが、ミケランジェロの彫刻の中にその石の類まれな美しさは生きているのだ。(p.110)

そのロンダニーニのピエタ について、まとめて紹介しよう。

ミケランジェロには大きく分けて4つの時代に創られたピエタ像がある(p.77以下)。1) 嘆きの聖母(24歳作、ヴァチカン蔵)。2) バンディーニのピエタ(未完、晩年、フィレンツェ蔵)。3) パレストリーナのピエタ(未完、80歳頃、フィレンツェ蔵)。4) ロンダニーニのピエタ(未完、89歳、ミラノ蔵)。

「キリストを後ろから抱きかかえたマリアが大理石の

塊と一体となって、グワーツとなって、見るものを圧倒させる。」(p.78)(「月報」2007年3月号p.3の写真参照)

正面から見ると、キリストの脇に肩を持たぬ一本の腕があるのだが、この存在が何かを暗示しているように思えてならない。・・・大理石から掘り起こされ、そしてもぎ取られたような腕こそ、ミケランジェロの腕ではないだろうか。・・・その腕は、天使の羽のように見えるゆるやかなカーブを描いた石を背後にもつ。三日月型の弧は、キリストの右足と美しい二重奏をかもし出している。(p.86-87)

安田侃は、ミケランジェロはじめ多数のイタリア人の助けと励ましに導かれて、30歳以後、イタリアで相次いで発表の機会を得、ことごとく成功した。今や堂々たる現代の代表的彫刻家として認められていて、その評価に關しての著者の記述には大いに興味を引かれるのだが、先述のとおり、あえてそれには触れない。

ただ、著者の結論の部分で、ミケランジェロと安田との関係が、つぎのような言葉でしめくくられていることを記しておく。

ミケランジェロのロンダニーニのピエタ に感動し、精神を刻む彫刻を自らの原点にしようと誓った安田侃。

彼はピエタのなかに何を見ていたのだろうか。

それは、互いをいたわり合う深い愛、もっとも尊い慈悲の心を形象化させているものへの驚きであり、憧れであった。彫刻と向き合った人が、ただ単に癒されるだけではなく、深い感銘と共に、誰かに優しくしないではいられないような愛の伝播をもたらせることのできる彫刻、それこそが安田侃の求める形であるのだ。

(p.252)

安田侃 真無  
に座る若者たち  
ミラノ大聖堂前  
(p.131 所載)



「月報」2006年1月号から07年2月号まで、14回にわたって連載していただいた白木博也氏の「受難曲と美術作品」は、私たちの《マタイ受難曲》理解に、イメージの深さと豊かさを添えてくださいました。なかでも、中心的に紹介していただいたドゥッチョのシリーズは、公演当日のプログラムに、カラーで再登場させていただき、好評を博しました。感謝申し上げます。

余勢をかって、「受難」につづく場面である「復活」の主題の名画をご紹介します。

## 「復活」の美術作品

白木 博也（後援会員）

ヒューベルト・ファン・エイク（1366? - 1426）

「石棺のかたわらの3女性」

オランダ・ロッテルダム、ボイマンス・ファン・ベウニンゲン美術館

マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメの3人の前で、キリストの復活を告げる天使。兵士たちは深い眠りについている。（マルコ16章1-8参照）



ピエロ・デルラ・フランチェスカ（1410/20 - 1492）

「キリストの復活」

イタリア・サンセポルクロ市立美術館

キリストが刑死して3日後、眠る護衛兵士たちの前で、棺を蹴って立ち上がる復活の情景。



柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その4>

## カンタータ第42番《同じ安息日の夕べ》

私たちは《マタイ受難曲》を演奏した。キリストの受難は、十字架までの苦しみと辱(はずかし)めにつづく、酷い十字架上での死でおわる。第54曲のコラール おお主のみかしら にその内容は凝縮されている。そして、遺体が墓に葬られるところまでが、受難曲の扱う範囲であった。しかし、聖書はそこでは終わらない。その後、キリスト教信仰で最も大切な、主イエスの「復活」が記されている。

神の子イエスが死では終わらず復活したことは、どんな暗闇でも、いかなる絶望でも、決してそれだけでは終わらないことを意味する。主を見捨てた罪悪感と、主を喪失してしまった虚無感から、心の扉も閉ざして集まっている弟子たちの小さな群れの中に、励ましを与えるために、復活の主イエスが入ってくる。自分を見捨てた弟子たちに、罪を問うのではなく、やさしく語りかけ、希望を与える。慈しみとはこのことをいうのだろう。

カンタータ第42番は、復活祭の次の週の礼拝で初演された（1725年4月8日、ライプツィヒ）。

1曲目のみずみずしいシンフォニアは、キリストの復活の「驚き」と「喜び」が交差して入り混じるような旋律で、新しい復活の命へのわくわくした躍動感が伝わってくる。第2曲（トレチタティーヴォ）で弟子たちの中に復活したキリストが入ってくることが告げられると、安らぎにみちた旋律に促され、アルトの落ち着いた調子で、信じて集まるものの中に、主が共にいることが歌われる（第3曲アリア）。人生にはいろんな問題があるだろうけれど、それがずっと続くわけではない。主がともにいるのだから、恐れることなんてないじゃないか、とコラール・デュエット（第4曲、S/T）がテンポよく続き、次にバスの確信に満ちた旋律で、人生の盾となる主イエスへの信仰が歌われる（第5曲トレチタティーヴォ、第6曲アリア）。この復活のメッセージを受けて、曲の結びは、アーメンで終わる「祈りのコラール」（第7曲）である。ここでは、キリストのように、弱っているものに光を当てる本当の平和と、そのような正しい政治が行われるよう祈っている。

今年のイースターは、この曲が282年前に初演された日と同じ4月8日である。このカンタータの祈りは、この日本に生きる私たちに確かな調子で響き、勇気と希望を与えてくれる、バッハ不朽の傑作といえよう。

（やなぎもと・ひろし、団員：バス）

CD バッハ・カンタータ 50 曲選 [第6巻] に収録。S 名古屋木実, A 田中奈美子, T 佐々木正利, B 宇佐美桂一, 大村恵美子指揮/訳詞, 1991年録音(第69回定演)。演奏楽譜: 15